

「博士論文を終えて」

木村正子

私は2014年3月に論文を提出し、博士（文学）の学位を取得しました。入学してから学位取得までの期間は猛スピードで駆け抜けたような気がします。今振り返るとさまざまな思いがよぎり、反省すべき点多々あります。それでも、総じて私の研究生活に一つの区切りをつけることができたという点で満足のいく結果となりました。そこで私の経験が後輩のみなさんに何らかの役に立つことがあればと願い、この2年間で学んだことをまとめてみたいと思います。

私の研究分野は19世紀の女性作家エリザベス・ギヤスケルの作品研究です。卒業論文と修士論文では別の作家を扱っていましたが、博士論文では新しい作家の作品に取り組むことになり、全くゼロからのスタートではないにしても、それに近い状態であったと記憶しています。実は本学に入学する以前、私は他大学院の博士後期課程で学び、論文の準備を進めていました。満期退学後も研究員として論文執筆を続けていたのですが、どうしても期限内にまとめることができず、提出できないまま終わったのです。これは非常に苦い経験でした。この失敗には大きく二つの原因があり、ひとつは論文全体の骨子となる一貫したテーマが見いだせなかったこと、もうひとつは非常勤の仕事やその他の雑事に忙殺されて、それを口実に論文執筆を後回しにしてしまったことです。

論文の執筆は全体の構想をまとめることから始めます。これは論文の設計図を作成する作業で、各部・各章の構成を考え、主たるテーマに基づいて各章で論を展開するという手順を踏みます。この設計図が博士論文執筆計画書になるのですが、私は、最初の博士後期課程入学時にはこの計画書の意図や役割をきちんと理解していなかったため、とにかく投稿論文と口頭発表のための原稿作成に終始していました。そして3年後、発表した論文の数もそれなりに増えて、そろそろ博士論文に着手ということになったのですが、個別に作成された原稿はギヤスケル研究という意味では一貫性はあるものの、それらをまとめて博士論文として成立するにはまとまりに欠けていました。そこで既発表の論文を土台にして、新たに博士論文として書き直しを始めましたが、結局時間切れで論文として完成させることはできませんでした。当時、目標を失ってしまったこととそれが自分の力不足ゆえの結果であることに対するショックが大きく、書きかけの原稿も封印してしまいました。

しかしながら数年後、名古屋大学大学院に入学し、もう一度博士論文執筆にチャレンジ

する機会を得ることができました。この貴重な機会を決して逃してはいけないと心に決め、是が非でもやり遂げるといふ思いが支えになったことは言うまでもありません。長らく放置しておいた論文の原稿に再び目を通し、今度はきちんと論文構成からやり直すことにしました。

他大学院にて学んだ経験があるものの、学びの場が変わればシステムや手順も異なりますが、博論の土台はやはり博士論文執筆計画書です。執筆計画書は、研究の題目、目的、概要、目次、そして各部・章の要約から成りますが、論文は最終的に数百ページに及ぶので、その要点を端的にまとめたものになります。大学院の受験時に最初の執筆計画書を提出しますが、その後執筆段階で様々な変更が生じてきます。けれどこの計画書があるからこそ、論文作成中のどの段階においても一貫したテーマのもとに書くことができます。過去にはこれをなおざりにした経験から、今回私にはこの計画書が論文完成までの重要な指針となりました。実際に論文を書くという作業に関しては、私には入学した段階で過去に書いた未完成の原稿がありましたので、それを生かして修正を行うことにしました。

さて論文作成を進める上で、ひとつひとつの段階がクリアできているかを確認する機会が必要です。本学ではD1の学期の終わり(2月)に研究発表会という発表の場が与えられますが、私は以前の大学院でこのタイプの研究発表会がなかったため、要領を得ず、何をどのようにしていいのかわからないまま新年を迎えてしまいました。この発表にはまずレジュメが必要です。基本的には執筆計画書をもとに作成すればよいのですが、同じものではこの一年間に何をやったのかが判別できません。そこですでに博士号を取得された先輩にメールでアドバイスをお願いしたり、レジュメの見本を見せていただいたりしましたが、この時ほど研究者間の繋がりをありがたいと思ったことはありません。文学の研究は概して一人でやる孤独な作業が大半ですが、やはり他者とのやりとりも大事です。研究の内容に関する情報の交換だけでなく、一人勝手な研究スタイルに甘んじていた私自身を見直すきっかけともなりました。もちろん主査となる指導の先生とのコミュニケーションが一番大切であることは言うまでもありません。知らないことを知らないままに放置して、後に取り返しのつかない事態になってからでは遅いのです。わからないことや曖昧なことは訊くこと、これは今も心がけていることです。

そして出来上がったレジュメをもとに今度は発表原稿の作成です。この研究発表会は、一年前と比較してどこまで研究が進んだかを報告する場なので、レジュメでは論文の概観を紹介する形にし、発表の場では要点をさらにかいつまんだ形で話をしました。一人の持

ち時間は質疑応答を含めて 30 分です。レジュメをそのまま読み上げては貴重な時間が無駄になると思い、現時点での私の考えはこれですという点を強調して発表しました。この研究発表会には他の講座の先生方や院生のみなさんも参加されますので、貴重なコメントをいただくこともできます。

D2 になると今度は博士候補生資格審査会が開かれます。この会では主査・副査の先生方の前で、現在論文がどれくらい進行しているのかを発表するのですが、D1 の研究発表会と同様、他の講座の先生方や院生の方々も出席されます。この会でも事前にレジュメを用意した上で、当日は口頭発表と質疑応答に臨みますが、発表時間が前回よりも長く 30 分です。私はこの段階で論文が半分以上できていましたが、先生方のご指摘やコメントによって、今まで見逃していた点に気づく点多々ありました。この審査会に合格すると、いよいよ論文提出が射程内に入ってきます。

しかしながら私はこの後にスランプに陥り、夏休み中も論文が進まず、一時は論文提出を半年先に延ばすことも考えました。その都度指導の先生から叱咤激励いただき、当初の目標を見失いかけていた自分自身と向き合い、何とか仮綴じ提出、予備審査、口頭試験と進みました。この間は非常勤の仕事もあり、余計なことを考えている暇もなく時間との闘いであったと思います。今から考えますと、論文提出を半年先に延ばしても内容にはほとんど変化はなく、現実逃避の時間を得るにとどまったのではないかと思います。特に私は過去に挫折しているわけですから、今度は失敗したくない、いや失敗できないという気持ちがありました。私たちにはそれぞれ個人的に抱える状況がありますし、一律にこれが一番いいやり方という決定を下すことはできませんが、やれる時にやる、そして好機を逃さないという姿勢は大切だと思います。

こうして無事に博士号を取得することが叶いました。ここに至るまでには指導の先生を始め、本当にいろいろな方々のサポートが必要でしたし、それが得られたからこそその成果であると思います。私はさまざまな事情から遠回りをしてここまで来まし、本格的に研究を始めた年齢も遅くなってからです。それでも、何かを始めるのに遅すぎることはないという信念のもと、今に至るまで研究を続けてきました。それには私自身の意思と行動だけでなく、それを実行できる環境にあったことを感謝するばかりです。拙い私の経験談ですが、現在博論を執筆中の方々やこれから取り組む方々の参考になれば幸いです。

非常勤講師（同志社女子大学・京都女子大学・大阪学院大学など）